

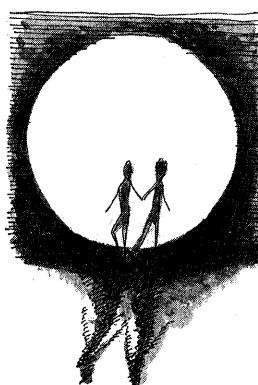
## 『政治をするサル』

### 『仲直り戦術』

### 『類人猿の知恵試験』

### 『生物学と方法』

柴坂 寿子



「私、えりちゃんの隣がいいの」。お集まりの時に大声で宣言するあや。「へ?」といった顔のえり。そのえりの隣から頑として動かないあけみ。幼稚園に観察に行くたび、こうしたやりとりがあっけらかんと行われていることに深く感動してしまう。そんなこと言つて、えりちゃんがいや

と言つたら自分は傷ついちやうじゃないかとか、「みんな仲良く」とかはさておいて、思つていることは思つていることだものね。大人だってそんなことしょっちゅう思つてはいる。でも口に出して言わない。へたすると思つてことさえ気づかないようにしている。「私は大丈夫」ってひとり

で座つてたり、氣を回して席を譲つてあげたりする。

無意識にやつてしまつていて、表現を避けている気持ち、認めがたい考え、たまには自分もやつてゐるけれど、全然やつていないと信じていい行い。こうしたことがほんとはあるんだと気づかせてくれる出会いは苦くもあるけれど、どこかほつとしたり笑つてしまつたりする大切な体験だ。異文化の人たちとのかかわりや、「異文化としての子ども達」とのふれあいはそんな出会いの宝庫である。私は「異文化としてのお猿さん達」をそれに付け加えたい。

例えば『政治をするサル』(F・ドウ・ヴァール著、西田利貞訳、どうぶつ社、一九八四)はオランダの動物園でのチンパンジー・コロニーの観察記録である。ここでは二十数頭のチンパンジー達が屋外の広い放飼場で自由に暮らしている。この本はその暮らしの六年間に渡る観察を、雄達の

「権力争い」の歴史を縦軸に、コロニー全体でのサル間(?)関係を横軸にまとめたものである。

同じ著者の『仲直り戯術』(F・ドウ・ヴァール著、西田利貞・榎本知郎訳、どうぶつ社、一九九三)も前著に比べてドラマチックさはやや欠けるものの、著者が「仲直り」という現象があるに違いない」という眼鏡をかけて、四種類のサルを観察する態度がおもしろい。

ケーラーは学習での「見通し」の重要性の主張や、チンパンジーの道具使用の実験で有名な心理学者である。彼の著書、『類人猿の知恵試験』(W・ケーラー著、宮孝一訳、岩波書店)は学習心理学の古典といわれる本である。しかし「学習心理学」という言葉から私達が今受けとる印象とは全く逆に、この本はチンパンジー達の行動観察記録としてのおもしろさに満ちている。手の届かないところに餌を置かれた一匹のチンパンジーが、まずケーラーにとつてくれという身振りをし

て、ダメと分かると初めて棒にさわったというくだりなど、道具の使用という研究にこだわらないケーラーの正直さが出ていて私は好きである。「チンパンジーども」という翻訳から受ける印象とは裏腹に、チンパンジーの行動を述べる著者の気持ちは、彼らのすぐ近くにあるような気がする。

チンパンジーやらゴリラやらの本を読んでいるうち、「お猿さんがこうだから私達もこうなんだ。大昔からこうで、仕方がないんだ」という思いいに捕われるかもしれない。お猿さんで私達を説明しようとするわけである。それは私達がブッシュマンなどいわゆる「原始的」文化を持つ人たちの生活を見て陥りやすい考え方と似ている。

もう少し厳密に考えて、もしかして私達人類とお猿さん達の共通の祖先がもつっていた性質があつて、それが私達が「似ている」原因と考えるなら、それには他の猿ではどうなのかといった、も

う少し詳しい証拠が必要となる。これに対して、「私達の毎日の生活では埋もれて見えにくいことをはつきり見る足場」は、もっと手軽で確実に私達がお猿さん達から受け取れるメッセージである。

私がこうした考え方を受け入れられるようになったのは『生物学と方法』（白上謙一著、河出書房新社、一九七二）を読んだときである。私は高校時代物理の授業に全然ついて行けなかつた。「光を波と考えて…」「なぜそう考えるの？」で詰まつてしまふ。その根本的な原因は「類推」という考え方方が分からなかつたからだと思う。白上さんによれば、物理学が発展する上で、大きな支えとなってきたのは、論理的にはなんの保証もない、例えは玉突の玉を原子やら光やら途方もないものとまで比較するといった類推の方法で、理論や観測結果ができるがると建築の足場のように跡かたもなくとりはらわれるのだという。いわば發

見ための方法なのである。

夏休みの間に「こゝうあるべき」「こゝうあつてほしい」という考え方から少し開放されて、もっと気

樂に子ども達や周りの人たち、そして自分自身と  
もつきあうために、私は今せつせとチンパンジー  
やボノボの本を周りに集めている。  
(お茶の水女子大学)

## 『ニースエデュケーション

### —子どもをおじばむ早期教育—

デイヴィッド・エルキンド（幾島幸子訳）

大日本図書

田代 和美



痛烈なタイトルである。早期に誤った教育を子どもに押し付けても、何の効果もないどころか、弊害さえ与えてしまうことをデータや文献の裏付けに基づいて著者は警告している。そして幼い子

どもを持つ人びとに、誤った教育の要因、子どもにおよぼされる短期的・長期的な影響、健全な児童教育の見分け方、家庭における健全な教育の実践法を理解してもらうというのがこの本の主旨で